

「説唐」小説における物語の連続と増殖

—— 羅家の「報復」をめぐる ——

柴 崎 公美子

はじめに

隋唐期を舞臺にした歴史小説は、史書に依據した歴史敘述を重視するタイプから、史實から逸脱した荒唐無稽な内容を語るものまで多様な展開を示す。その中で人々に最も知られているのは、史實から逸脱したタイプである「説唐」をタイトルに冠する一連の小説群である。興唐故事に取材した『説唐全傳』（以下『全傳』と略稱）、薛家將の異域征伐を描く『説唐後傳』（以下『後傳』と略稱）および『説唐三傳』（以下『三傳』と略稱）がこれにあたり、清乾隆期に至って陸續と刊行された¹⁾。

これらは中國では「説唐系列小説」などと稱されシリーズ扱いされているが、まとまって成立したわけではなく、

それぞれ独自の先行作品を持つ異系統の物語である。例えば『全傳』は、明代以前には存在していたと思しき「舊本」に依據していたことが指摘されている²⁾。『後傳』の第十五回以降は、民間で古くから親しまれ元雜劇のテキストも残る薛仁貴征東故事を語る。『三傳』で描かれる薛仁貴の息子薛丁山の征西は、明傳奇『薛平遼金貂記』に見える。なお、これら薛家一門の戦記は、「薛家將故事」と總稱される。

『全傳』が依據した「舊本」のテキストは現存していないようなのだが、『後傳』と『三傳』の先行作品は現在でも見ることができ、比較研究もなされている。筆者も、『後傳』と明代までの薛仁貴征東故事作品とを比較して、薛仁貴夫婦が「破窯」に住んだという情節が『後傳』にの

みあることについて論じたことがあり、當時から「説唐」⁽³⁾ 小説の内容が先行作品からかなり増殖していることを認識していた。

本稿はその認識から、「説唐」小説の物語が増殖するメカニズムを明らかにするために、「報復」に着目した検討を行う。「報復」は「説唐」小説の内部において、物語増殖の原動力となつていことが認められるのである。とりわけシンボリックなものが、『後傳』五五回本の第一回から第十五回半ばにわたるいわゆる「羅通掃北」(以下「掃北」と略稱)部分である。⁽⁴⁾ 羅家一門の戦記を描く「羅家將故事」の一部であるこの物語は、先述した「説唐」小説先行作品のいずれにも属せず、他に先行作品に當たるようなものもなく、それ自體が清代における「説唐」物語の増殖だと見做せる。筆者は以前「掃北」の物語構造を分析し、家將小説に頻出する要素を巧妙に用いて、登場人物の強烈な「報復」の情動が描き出されていることを論じた。⁽⁵⁾ つまり、「説唐」物語において清代に増殖したと考えられる部分⁽⁶⁾が、報復を描いているということになるのである。

「説唐」物語における「報復」については、千田大介氏が「乾隆期英雄傳奇小説『説唐』の主題」(『早稻田大學大

學院文學研究科紀要』第四一輯第二分冊、一九九六年)において、興唐故事の主題が『全傳』に至って「忠義」から「復讐」へと遷移していることを論じておられる。『全傳』と「掃北」とが共に「報復(復讐)」を重視している點は、共時的なものだと認めても良いのではないだろうか。そういった意味でも、「掃北」で描かれる「報復」は、検討に値するものだと思われる。よって本稿では、「掃北」で描かれる報復の様相の詳細を確認し、その結果を踏まえて、「説唐」小説内で報復がどのように物語を増殖させているかを提示したい。

一、「掃北」で發生する報復について

北番の赤壁寶康王が唐朝に宣戦布告し、太宗が秦叔寶を元帥とする親征の軍を起こすも、木陽城にて空城の計に陥り困窮する。程咬金が長安へ援軍を求めに戻り、將軍羅成の子羅通が救援の軍を率いて駆けつけ、北番平定を成功させる。以上が「掃北」のあらすじである。こうした枠組みの中で、主要な人物がほぼ報復によって關連づけられるのが「掃北」の特色である。その主要人物と報復の状況を以下に挙げる。

①羅通…「掃北」の主人公で、太宗たちを救援するため進軍する。父羅成の非業の死を知り、仇である蘇定方への報復を誓う。

②蘇定方…かつては李世民に敵対し、羅通の父羅成を討つ。李世民に請われて降り、「掃北」の時点では銀國公に封ぜられている。羅通の報復を受け殺害される。

③羅仁…羅通の義弟で九歳の童子だが、怪力の持ち主。羅通を追って戦闘に参加し、屠爐公主に殺害される。

④屠爐公主…赤壁寶康王の養女で飛刀を操る女將。戦場で羅仁を殺害した後、羅通と出會って一目惚れし、結婚を約束すれば國家を唐に降らせると羅通に迫る。婚禮の夜、羅通から羅仁を殺したことを責められ罵倒されて自死する。

⑤蘇麟・蘇鳳…蘇定方の息子たち。蘇定方が父を殺害したと知った羅通から憎まれて強い壓迫を受け、蘇麟は敗戦の責任を取られ刑死し、蘇鳳は羅通を恐れ逃亡する。

このように、主要人物のほとんどが死に、しかも死因は全て主人公羅通の報復に起因していることがわかる。以上のことを踏まえて、その報復の様相を詳しく見ることにしよう。

羅通は、『後傳』第七回で、太宗救援のための二路定北元帥に任じられた際、母寶氏から父羅成が國のために命を犠牲にしたと聞かされる。羅通は「爲人子者理當與父報仇、…先報父仇、後去救駕」と、子として當然のこととして父の仇を取ることを母に誓う。羅通が「父の仇を取ってから、陛下をお救いする」と語ったことから、羅通の中で父の仇を取ることが太宗の救援よりも優先事項になっていることが窺える。羅通のこうした意志は、第九回にも示される。白良關の攻略に疲れうたた寝をしている羅通の前に、父羅成と祖父羅藝の亡霊が全身血塗れの姿を現し、敵を攻めあぐねてぐずぐずしている羅通を叱りつけて、「我乃是你祖父羅藝、這是你父親羅成、可憐盡遭慘死、無人伸冤、所以到你面前、要與祖父、父親報仇雪恨」と祖父と父の無念を伝え報復を迫る。羅通は彼らに、母に對する答えと同様に「待孫兒先查仇人殺了他、然後去救駕」と答える。羅藝の亡霊は「我那羅通的孫兒阿、難得你有此孝心」とその孝心を褒め、仇の名を程咬金に尋ねるよう告げる。程咬金によって目指す仇が銀國公蘇定方だと知った羅通は、「嗟、父王父王、你好忘臣子之功也。我羅氏三代盡忠報國、就是這一座江山、虧我父之功、怎麼反把仇人蔭子封

妻」と、親子三代に渡って仕えてきた羅家の功績を無視し、その仇である蘇定方を封爵した太宗に對しての怒りをあらわにする。そして、救援軍の兵糧係を務める蘇麟・蘇鳳を、何の過失も無いにも関わらず定方の息子というだけで虐げ、蘇麟を處刑し蘇鳳を逃亡させる。この時羅通は程咬金に「小侄斬了蘇麟、方出胸中一忿之氣。必須殺了蘇定方、我祖父、父親冤仇報雪」と語り、元帥として軍を統率する役目を無視してでも、私怨の鬱憤ばらしをせずにはいられない情念の強さを示す。

第十三回で太宗に謁見した羅通は、父の恨みを晴らしたいと訴え、夢に現れた父祖の亡霊が功臣の恨みも雪がせないばかりか逆臣を封爵する太宗を「不義之君」と稱したことを語る。太宗はそれを聞いて激しく悔やみ、羅通が蘇定方を處刑することを許す。

このように、羅通にとって父の報復を果たすことは、太宗救援や元帥の役割を遙かに凌駕する最優先事項であり、父祖の恨みのためなら太宗に無禮な言葉を發することも憚らないほどのものとして描寫される。

羅通の報復は父祖のためのものに止まらない。義弟羅仁を殺した屠爐公主にも、その強い報復の念が向けられ

「説唐」小説における物語の連續と増殖（柴崎）

る。羅仁はまだ九歳の童子であったが、羅成を慕って戰場に現れ、持ち前の怪力で羅通が苦戦した敵將鐵雷八寶を討ち果たす。しかしその直後に戦った屠爐公主によって飛刀を浴びせられ、切り刻まれて死亡する（第十一回）。羅通はこれを目の當たりにし、公主に對し激しい怒りと恨みを發する。一方公主の方は羅通に惚れ込み、武器の飛刀をちらつかせながら結婚を迫る。羅通は戦局を有利に運ぶため公主からの求婚を一旦受け入れるふりをし、「誓いを立てれば攻撃をやめる」という彼女の言に従って「もし公主を裏切れば、後に七、八〇歳の老人の手にかかつて死ぬ」と誓う⁸。羅通との出會いによつて屠爐公主が唐に與し、寶康王が降伏して唐の北番平定が成ると、太宗は功勞者である公主と羅通との結婚を進めようとするが、羅通は「兒臣還不與弟報仇、反與他成親、兄弟陰魂焉能瞑目」と抵抗する。結局太宗に押し切られ、初夜の寢床を迎える羅通であったが、羅仁殺害の恨みは止み難く、公主にむかつて「你把我九歲兄弟亂刀砍死、冤仇如海。我羅通還要與弟報仇、取你心肝五臟祭奠兄弟、此乃大義」と怒りをぶつける。ここで發言される「大義」は、羅通が義弟を殺されたことを理由に公主との婚姻に抵抗した際、太宗も「你欲報此仇、也是

「大義」と言及している。羅通は太宗にも公主にも、自分の報復感情を露わにする際に、羅仁がわずか九歳で殺されたことを強調し、その恨みの深さを訴える。羅通にとって、羅仁が幼くして無残な死を遂げたことが悲痛の極みであり、その報復をすることこそが「大義」の実現だった。

子として父の報復をし「孝」を盡くすことと同様に、羅通は義兄として義弟への「大義」を果たすために、君命による婚姻も受け入れず、公主を侮辱して自刃に追いやりさえる。「掃北」における羅通の報復は、父への「孝」と兄弟への「義」によって突き動かされ、太宗の意志や屠爐公主らの生命を踏みにじっても實行されるべきもの、そのように解することができよう。

さて、羅通の父羅成は、その活躍と死が描かれた『全傳』においても死後靈魂を顯している。しかしその時、必ずしも報復を願ってはいないのである。「説唐」小説物語の増幅に關わることで、その状況を次項で確認しておきたい。

二、羅成とその死

羅成は、『全傳』で「隋朝第七條好漢」に格付けされ、

白虎星が下凡した存在であり、燕山公羅藝の息子で秦叔寶の従弟と設定される。架空の人物であるが、『舊唐書』卷一八七上および『新唐書』卷一九一に立傳される羅士信という豪傑がモデルとされている。羅士信は十四歳の初陣で奮戦し、敵陣を恐れさせるなど勇名を馳せたが、劉黑闥との戦いで捕らえられ、若くして殺された。興唐故事の中で、李世民的有力な臣下でありながらただ一人羅成が唐の天下統一以前に命果てるのは、羅士信の死の投影なのである。

冒頭で述べたように、隋唐期を描いた歴史小説は多様で、羅成の扱いも作品により異なる。主な作品を今見られるテキストで刊行年が古いものから順に並べると、①嘉靖三二年楊氏清江堂刊『唐書志傳通俗演義』②萬曆四十七年金閨書林龔紹山刊『隋唐兩朝史傳』③崇禎六年序刊本『隋史遺文』④四雪草堂康熙三四年序刊本『隋唐演義』、そして乾隆元年序を冠する『全傳』となる。また、「詞話」ではあるが小説に近いスタイルを持つ『大唐秦王詞話』があり、これは萬曆年間刊行と思われる。

このうち、①『唐書志傳通俗演義』と②『隋唐兩朝史傳』は大部分が史書に據り、羅士信は登場するが羅成の存

在はない。③『隋史遺文』と④『隋唐演義』では羅成と羅士信は互いに別人として登場し、秦叔寶と共に活躍するのは羅士信の方である。『大唐秦王詞話』（以下『詞話』と略稱）では羅成字士信として登場する。このあたりの事情は小松謙氏によって詳しく論證されている。それによれば、隋唐歴史故事の傳播と發展の段階で、實在した羅士信という武將に成という諱が與えられ、秦叔寶と從兄弟同士かつ羅藝を父に持つという設定が生まれ、やがて「羅士信」の名が忘れられていった、という。同氏は、『詞話』は羅士信の諱を成とする設定が加わった頃の物語を傳えているのではないかと推論している。いずれにせよ「羅成」という人物が秦叔寶と親しく、かつ本編中で活躍するのは、『全傳』と『詞話』の二作である。そして、羅成が蘇定方によって殺害されるのも、やはりこの二作なのである。『全傳』では第六二回、『詞話』では第五〇回で羅成の最期が描寫される。兩者共通する内容をまとめると、次のようになる。

羅成は秦王李世民的腹心の部下として、その功績に大きく寄與していた。英王李建成と齊王李元吉は弟である秦王の功績を妬み、その勢力を削ぐために羅成を除こうとし

て、條件の悪い中劉黑闥の軍と交戦することを羅成に強いる。一方蘇定方は當時劉黑闥に仕えていて、出撃してきた羅通を泥土地帯（淤泥河）に誘い込む。蘇定方は羅成に降伏を勧めるが聞き入れられず、やむなく無數の矢を射掛けて彼を打ち取る。後に蘇定方は秦王に請われて唐に降り、重用されるようになる。

死後の羅成は亡霊となつてしばらくの間現世を彷徨い、人々の前に姿を顯す。『全傳』『詞話』兩者では共通して妻の夢の中に顯れ、二王の奸計と自らの悲惨な死を語るとともに、幼い息子羅通の世話を託して去る。その際の羅成の語りをそれぞれ次に引用する。

『全傳』第六二回…我那妻阿、我只因探望秦王、被建成、元吉兩個奸主設計相害、逼我追赶明州後漢王劉黑闥、中了蘇定方奸賊之計、射死淤泥河內。妻阿、你好好生看管孩兒、我去也。

『詞話』第五〇回…嬌妻聽我訴原因。昔日我隨唐太子、東征西討立功勛。漳南反了劉黑闥、齊王差領馬和軍。設計懷仇謀我命、揀將惡日要行兵。定方詐敗吾當趕、趕到周希坡下存。漢兵亂射吾身死、行短齊王絕救兵。

句句果然冤枉事、特來家內顯靈魂。我妻從此休懸念、莫想吾生探你們。好看三歲羅童子、無主冤家在你身。你今若有夫妻意、守著羅童拜祖墳。杞妻善哭城崩裂、寶女投崖誦至今。三貞九烈全名節、地府重完未了姻。

『詞話』では加えて、神將となつて陰兵を率い、唐軍を守護して劉黑闥軍を叩きのめし、秦王らに二王への恨みと秦王への報恩の念を訴える。

『詞話』第五一回…我王龍耳聽臣訴、玉葉英齊太不仁。自從隨駕邊庭上、五次三番要斬臣。多感衆官相勸勉、又施毒計害殘生。揀成十惡紅沙日、特遣微臣去戰征。豈料漳南多詭計、數番詐敗賺吾軍。周希坡下軍屯陣、誤入天羅地網門。當時遂了英齊意、不發明橋救應兵。拼命當先追漢將、鎗簡橫衝餓虎群。連敗劉朝十八陣、臨河耀武要交爭。不防陷在淤泥內、閃過漳南數萬軍。放箭七枝傷漢將、恨難插翅望空騰。漢兵亂放雕翎箭、獨手難遮喪了魂。一自投唐逢聖主、未曾保駕立功勳。在生多受唐朝祿、死後陰魂報主恩。殿下高擡明鏡照、鑒察銜冤負屈臣。敬德皇兄咸在此、相煩傳語我家門。

『全傳』と『詞話』における羅成の魂の訴えを詳細に確認すると、羅成は二王の企みに陥ったことや非業の死の苦しみを訴えはするが、報復を望むことはしていない。『全傳』では妻に幼い子の後を託して別れを述べて終わり、『詞話』では功績を挙げられないまま死んでしまったことを秦王に詫びて、義兄たちに家門の存続を託して消える（實際は、尉遲敬徳が鞭を鳴らして追い拂う）。興唐故事作品における死後の羅成は、報復の願望よりも、自分の無残な死を理解してもらいたいという気持ちと主君のために功績を立てられなかった無念、残された人々の今後を案じる心の方を強く持っていると思倣せる。

『全傳』および『詞話』では、羅成を殺した仇敵たちが罰せられないまま物語が進むが、これは、英・齊二王が後の「玄武門の變」で倒されるべき存在であったため、そして蘇定方も、秦王が望んで投降させ重用したという事實が採られたためなのであろう。

このように、文字化された興唐故事では羅成が報復を望む描寫はされず、羅成の仇である英・齊二王と蘇定方が罰せられる、或いは羅成のために討たれることはなかった。個人の無念を晴らすよりも、國家の大事を描くことが優先

されたと考えられる。一方で、演劇には羅成の「息子」の働きによって蘇定方が秦王に討たれるという物語がある。乾隆三十九年刊行『綴白裘梆子腔十一集外編』の「慶集」には、羅成の祭壇の前に秦王が蘇定方の首級を捧げる場面が演じられる曲本が収められている。そしてその曲本では、『全傳』では羅家將の一人であつた羅春が羅成の「息子」として登場するのである。

三、民間藝能の「羅成の子」と、父の報復をする息子たち

『綴白裘梆子腔十一集外編』（以下「十一集外編」と略稱する）における羅成戲は、「番畔」「敗虜」「屈辱」「計陷」「血疏」「亂箭」「哭夫」「顯靈」の八齣からなる。『綴白裘』は當時江南で實際に流行し演じられていた戯曲の演出本に據っているとされる。この羅成戲は、第二齣の最初の唱までは「點絳脣」「八聲甘州」「風入松」と崑山腔の曲牌が記されるが、その後は「亂彈腔」「高腔」「梆子腔」「急板高腔」「吹調」といった板式變化體が用いられており、こうした形式の混在は當時の地方劇の過渡期的様相を示すと考えられる。⁽¹²⁾ 中華書局一九五五年排印本では「淤泥河」と題

されるこの曲本のあらずじは、以下の通りである。

隋朝の臣下であつた蘇烈字定方は、高麗に逃げて國王より元帥に任じられ、唐に攻め込む。李建成と元吉の二王は弟である秦王世民の功績を妬み、秦王を陥れて牢獄に繋ぎ、自分たちが蘇定方を討つて手柄を奪おうとする。たまたま太原に秦王の様子を訪ねにやってきた羅成は二王によって無理矢理先鋒に任じられ、單騎で蘇定方の首を取って来いと難題を押し付けられる。首級を挙げられないまま戻った羅成は棒で打たれ、重傷を負った状態で再び單騎出撃する。しかし戦ううちに日が暮れて、再び定方の首を取る前に戻らなければならなくなった。しかし唐軍據點の「銘關」の門は硬く閉ざされており入れない。父羅成を心配し、羅春がこっそり城の上までやってくる。門を開けるよう望む父と、二王の計略により開けられないと嘆く子。羅成は自らの指を食い破り、血書をしたため、矢に結んで城の上に放ち、太原まで届け事情を皇帝へ奏上するよう羅春に託す。その後再び出陣した羅成は、淤泥河に追い込まれ自刃する。羅成の夫人である王氏が夫の祭壇の前で嘆いていると羅春がやってきて、秦王が高麗を征服し蘇定方を殺したのでその首級を持ってきてくれると告げる。秦王は

尉遲敬德、秦叔寶、程咬金と共に羅成の祭壇を訪れて定方の首を捧げる。すると羅成の靈が姿を顯して秦王に感謝し、叔寶ら義兄たちの健康を願ひ、羅春に母に孝行を盡くすよう諭して消える。秦王は羅成に追贈し、羅春に羅成の後を襲わせることを約束する。

これと同じ内容は京劇に「羅成叫關」や「周西坡」と題する演目がある他、地方戲では川劇に「羅成修書」、秦腔に「淤泥河」、梆子戲に「羅成叫關」、越戲に「掛玉帶」といった演目が見られ、説唱文藝では子弟書に「周西坡」、太鼓書に「羅成叫關」などがある。⁽¹³⁾ その中では羅春は「義子」とされることもある。羅成は二〇歳そこそこで死んだ設定なので、羅春のような大きな子がいることの奇妙さと、羅通の存在とを鑑みて「義子」とすることで合理化をはかったものかもしれない。

この物語の特色は、羅成の「息子」である羅春の働きによって、仇の一人である蘇定方が討たれていることである。間接的な形ではあるものの、息子が父の報復をしていると見做せるのである。

「淤泥河」に用いられる「亂彈腔」や「梆子腔」は、乾隆期には「花部」と稱され、崑山腔が「雅部」として士大

夫層に尊ばれたのと對照的に、庶民階層に親しまれたものであった。⁽¹⁴⁾ 「淤泥河」で蘇定方が秦王に討たれたのは、この戯曲の受容層である庶民にとって、蘇定方が秦王に降ったという歴史的事實よりも「命を奪った罪は命によって贖われるべし」という思想の方が重要だったからではないか。古くから民間で傳承されてきたとされる説唱詞話『花關索傳』⁽¹⁵⁾では、糜竺・糜芳兄弟と劉封の裏切りによって死んだ關羽が、張飛とともに劉備の夢に現れ報復を願ひ、その願ひに應えて關羽の息子花關索が糜竺らを殺害する。『花關索』におけるこうした報復を、民衆の立場での英雄鎮魂だと指摘する考えもある。⁽¹⁶⁾ 民國以降に抄寫された可能性が高いものの、内容は古い祭祀の實態を伝えるところしき山西省の祭祀帳簿『迎神賽社禮節簿』に、「羅成顯魂」という演目が見える。⁽¹⁷⁾ 「淤泥河」がそうした羅成祭祀劇の流れを汲み、息子が父の仇を討ってその靈魂を鎮めるという内容に構成されたということは十分に考えられる。羅通は當時三歳の無力な幼子にすぎなかったため、羅春はその代わりに父の仇を討ち得る息子として設定されたのではないだろうか。戯曲の中で直接蘇定方を討ったのは秦王らであり、羅春は血書を届けただけなのだが、どのような形であ

れ父の報復に息子が関わっている點は注目に値する。

息子が父の報復をする要素は、『花關索傳』がそうであつたように、とりわけ武門の父子に關連して見られる。楊家將ものの雜劇『昊天塔孟良盜骨』（元曲選）所收、以下『昊天塔』と略稱する）では、父の靈魂による訴えを聞き入れ、息子たちが遼兵の元にあつた父の遺骨を取り戻すと同時に、父の仇の敵將を殺す。

岳飛の物語においても、父の報復（および名譽回復）をする息子たちという要素が新たに加わる事例がある。晩明までの岳飛故事作品は、岳飛が秦檜によつて殺害されるまで、あるいは岳飛を殺害した秦檜が夫婦ともども冥府で裁かれるまでを描くが、崇禎年間の人と考えられる湯子垂による傳奇『續精忠記』⁽¹⁹⁾では、秦檜によつて岳飛が陥れられ殺害されたことを韓世忠が暴き、岳飛の遺兒たちである岳雷・岳電兄弟が秦檜夫婦を審問して刑死に追い込むという筋書きが現れる。

「説唐」小説に視點を戻せば、『全傳』の主人公格である秦叔寶もやはり武將であつた父を殺害によつて奪われ、その復讐を誓う息子として描かれている。叔寶の父である北齊の將秦彝は、北周の楊林に敗れて死ぬ。それ以降、楊林

は叔寶にとつて父の仇となる。楊林が隋の重臣であることと叔寶は隋に歸順することをよしとせず、叛逆する。

以上のことから、武門の父子と報復物語との親和性は高いと見てよい。「淤泥河」の構造も、こうした武門の父子と報復物語の結びつきが發想の元であろう。第二項で見たように、『全傳』では羅成の魂は報復に言及しないまま旅立つたが、「淤泥河」のような作品の存在は、その結末を覆しても息子が父の仇を討つ物語を要求するエネルギーが存在していたことを示している。「掃北」も、そうしたエネルギーを背景に生まれたであろうことは想像に難くない。そしてそのエネルギーとは、第一項で述べた父への「孝」や兄弟への「義」を重んじる精神から發しているのではないか。「はじめに」の項で舉げた千田論文では、「復讐を「父子・兄弟といった血族のごく狭い範圍で繼承される、祭祀的行爲」であると述べる。この項で見てきた物語は、詞話・演劇では共通して、父の報復を果たした後に息子たちが奠祭を行う様が見られる（『花關索傳』では別集十葉裏から十一葉表、『昊天塔』では第四折、『續精忠記』では第十三折）。『全傳』では楊林を討ち果たしたのは叔寶ではなく羅成であり、叔寶は父のための奠祭は行わないのだが、

それは物語が「報復」を最終目的としないからであろう。千田論文では叔寶の物語が復讐後も続くことについて「復讐の完了は讐討ちにとどまらず、讐が発生する以前の地位の回復までが含まれるためであろう」と解する。『後傳』十三回では、太宗が羅成のために奠祭の宴席を設け、その場で羅通が蘇定方を處刑する。この時の様は次のように語られる。

羅通拜了四拜、扯起一口寶劍、叫聲「祖父、父親、今日陛下親在賜祭、仇人也在此、孩兒與你報仇了」就把劍望蘇定方心內豁綽一刀、鮮血直冒、把手一撈、撈出一顆心肝。定方跌倒塵埃、一員大將歸天去了。底下有撓鈎手搭去屍骸、不必細表。

息子が仇の心肝を取り出し、亡靈に捧げる行爲は『花關索傳』と「昊天塔」にも見える。『昊天塔』もまた、英雄鎮魂祭祀の骨組みを用いていると言われる戯曲であり、⁽²⁰⁾「掃北」の物語はこうした演劇と近く、そこに描かれる報復は英雄鎮魂の要素を色濃く有すると考えて良いだろう。

四、報復の接續と物語の増殖

第三項までの考察によって、「掃北」における羅通の報復の情念は、父への「孝」から發し、「孝」のための報復は、君主よりも優先すべきものとして描かれていることが確認された。またその様式は、下層社會の民衆が望む「英雄鎮魂」のそれであつた。「掃北」の物語は、『全傳』で實現されなかつた羅成の鎮魂を、「孝」に發する報復のエネルギーを借りて「説唐」小説の中で實現させたと見てよいのではないだろうか。では、羅通にとってのもう一つの報復、義弟羅仁への「大義」のための報復は、何のために描かれたのだろうか。

羅通は、羅仁の報復を遂げるため、屠爐公主に立てた誓いを裏切る。その裏切りの報いが『三傳』第二〇回で現實のものとなり、羅通は界牌關の老將王不超と相討ちとなつて死ぬ。羅通の死を嘆く太宗に對し、徐茂公が「陛下はご記憶でしょうか？かの掃北にて、羅通は屠爐公主に終生の誓いを立てました。もし（誓いを）忘れたなら、八、九〇歳ごろの老番兵によつて死ぬ、と。今、果たしてその言葉の通りになつたのです」と述べ、「掃北」で行われた報復

の結果が、作品を隔てて『三傳』で現れたことが明らかになる。この『三傳』は、「はじめに」の項でも述べたように、薛家將の物語である『薛平遼金貂記』⁽²²⁾（以下『金貂記』と略稱する）を下敷きにしたものと考えられており、羅家將物語とは全く関係がなく、羅通も登場しない。にも関わらず『三傳』に「羅仁の報復の報いとして死ぬ羅通」の物語が組み込まれているのである。

同じような事例は他にもある。羅通が蘇定方を討った結果も、作品を跨いで新たな事件の火種となる。蘇定方の次男蘇鳳は、羅通の壓迫から逃がれて西番哈迷國に流れ着き、子を儲ける。その息子が哈迷國王に取り立てられ、元帥に封じられたのが、『三傳』で唐の敵對者となる西番哈迷國元帥蘇保同である。蘇保同は祖父と父の恨みを背負い、「三世冤冤要報仇」と戦書に書きつけ唐に宣戰布告する。つまり蘇保同の存在は、羅通の屠爐公主に對する裏切りの報いと同様に、「掃北」と『三傳』とを報復によって關連づけていることになる。

ところでこの蘇保同は、『金貂記』に登場する「西遼大元帥蘇保童」がモデルだと考えられる。蘇保童は薛仁貴征東故事（以下征東故事と略稱する）の敵役である高麗元帥蓋

蘇文の甥で、西遼に逃れて元帥に取り立てられたという設定であり、蘇定方とは何の関係もない。『三傳』は、『金貂記』上の「蓋」と「蘇」の姓の不一致を合理化するために蘇保同を蘇定方の孫としたのかもしれないが、その當否はともかく、重要なことは、羅家將故事とは發生史上關係のない薛家將故事の登場人物が、「説唐」小説において羅家將故事に取り込まれているということである。これは先に述べた『三傳』における羅通の死の逆パターンと言える。

以上のように、「掃北」における報復は、『三傳』で起こる事件の原因となり、「掃北」と『三傳』とを關連づける役目を果たしている。かつ、羅家將故事と薛家將故事という異なる系統の物語同士を結び合わせる原動力ともなっているのである。

報復がこうした作用をもたらしているのは、「掃北」と『三傳』との關係にとどまらない。例えば『全傳』で描かれる單英雄信の報復は、羅成との因縁とともに『後傳』の物語に結びついてゆく。李密と王世充に仕えた單英雄は、『全傳』では李淵によって兄を誤殺されたことで李氏を憎み、その復讐心から最後まで唐の對抗勢力に身を置いたと

いう設定になっている。秦王がいかに歸順を勧めても受け入れず羅成に處刑され、李氏と羅成への恨みを抱いたまま高麗元帥葛蘇文（蓋蘇文の別名）に生まれ変わる。羅成もまた薛仁貴に生まれ變わって、『後傳』第十五回以降の征東故事で雙方は再びぶつかり合う。

單雄信と羅成がそれぞれ葛蘇文と薛仁貴に轉生する話自體は『詞話』にもあり、『全傳』に特有というわけではない。興唐故事と征東故事とを結び付けようとする發想が明代からあったということなのだろう。それが『全傳』に至ると、征東故事に見える薛仁貴と葛蘇文がそれぞれ白虎星と青龍神の下凡したものとする設定までもが單雄信と羅成に當てはめられる。⁽²⁵⁾單雄信の報復の念に青龍神と白虎星との因縁話が重なることで、『全傳』から『後傳』への連続と、興唐故事と征東故事の連携とが一層強化されている。

以上に述べてきたように、「説唐」の諸小説は報復によつて互いに接續しあい、接續する部分に物語の増殖や擴大が見える。そして、物語が報復によつて接續する時、その全てに羅家將（とりわけ羅通）が関わっていること、「掃北」と他作品との接續が多い。「説唐」小説において羅家將が物語の接續に関わり、時に異系統の物語を侵食してい

るということである。親戚關係にあるはずの蘇保同と蓋蘇文との姓の不一致など、羅家將故事に取り込まれたことで齟齬が改まっている例もある。「掃北」自體、羅成の仇が死んでいないという『全傳』の積み残しを解決し、次なる物語へスムーズに接續できるよう配置されたとも見做せる。⁽²⁶⁾

ところで、羅成のために行われた報復には英雄鎮魂的な意味を見出し得るのだが、その他の報復にも格別の意味は存在するのだろうか。

羅通は、「大義」だとして屠爐公主との婚姻を拒絶し彼女を自死に追い込んだ後、部屋を出て遊びに出かけている（「跑出房門、往那些殿亭遊玩去了」）。第一項で羅成が公主に向かつて「取你心肝五臟祭奠兄弟」と言ったことを提示したが、特に實行された様子はない。蘇保同も、父祖の仇を討つことよりも、唐の國土を哈迷王に獻上して功勞を認められることを期待する様子が見られる（『三傳』第十回）。單雄信に至っては、轉生するのだから仇討ちの意義すら變化している。羅成のための報復以外のそれは、單に物語を接續・増幅するための装置・趣向として用いられているだけなのではないだろうか。それについての興味深い例とし

て、上海椿蔭書莊發行の石印鼓詞『羅通報仇掃北』を擧げ^②る。羅通が父羅成の仇として蘇定方を討つ情節は「掃北」と同じだが、この物語では龍鳳山王孫天明の娘月娥公主が羅通の夫人となつてその報復を助け、羅通は功績により封爵を受ける。ちなみにこの鼓詞は巻端題が「改良羅通掃北報仇忠孝全傳」となっている。羅仁のための報復で羅通の妻となる人が死なず、物語を團圓に「改良」したということとを意味するのだろうか。いずれにせよ、この物語では羅通の報復は父羅成のために行われて終了し、物語は増幅も接續もしない。羅仁のための報復に英雄鎮魂的な意味があつたのだとしたら、民衆に好まれた鼓詞の中にこそ描かれるのではないだろうか。

終わりに

『三傳』の中の報復は、いよいよ接續・増幅装置の度合いを強める。『三傳』では数多くの神仙や道士が登場し、征西軍に殺された弟子や仙友の報復を出陣の理由とする。しかし彼らによる報復はもはや「掃北」に見えたような力や意味を失い、單に新たな敵の登場とあつけない退場を繰り返すための口實として軽々しく持ち出されるだけのもの

となる。それでも、報復する相手や情動を持たない人物は物語展開に關わることでできず、主人公の薛丁山は父が死に太宗が都に歸ると、途端に毒や病氣に當てられて寢轉がつているだけになる。征伐すべき相手である蘇保同の因縁の相手が羅家將に遷移したことで、薛丁山が闘う意味が失われたということもあるだろう。

薛丁山に代わつて『三傳』中盤以降の主役となるのが、その妻樊梨花である。樊梨花は哈迷國の寒江關守將樊洪の娘で、薛丁山に惚れて唐軍に身を投じたことで哈迷國側から敵視され、報復される側になる。彼女が受ける最大の報復行為が、元婚約者楊藩によるものである。楊藩は自分を捨て薛丁山に走つた憎き樊梨花に死後投胎し、薛家の三男薛剛に轉生する。薛剛は武則天の憎しみを買い、薛氏一門が刑死させられる原因を作る。武則天が丁山を都に召し出した際、樊梨花は吉凶を占つて丁山の死期を悟り、「三兒は白虎關楊藩の轉生で、丁山に殺されたから、その仇の報いなのだ」^②と理解する（『三傳』第七三回）。楊藩の恨みは薛一門が刑死させられたことで成就するからか、薛剛は一族の報復を誓い、武則天とその一味を滅ぼし、李旦を補佐して即位させる。英雄の子が放浪し貴人を復位させて一族の

榮譽を回復するという情節は『説岳全傳』などにも見られるが、『三傳』の場合報復によってもたらされた災禍の落とし前を、事實上報復の當事者本人がつけるという形に収めているのが獨特である。報復する側が報復される對象の身内になるというトリッキーな方法で、『説唐』小説で連続し続いた報復の連鎖はついに終局し、團圓が訪れる。

こうした『三傳』の展開および結末からも、『説唐』小説における報復が装置化されていることがわかるだろう。しかし、本來は民間において鎮魂とみなされた報復が、『説唐』小説において物語を接續し増幅するためのシステムとなっていることは、清代の新たな創作の一形態として認めても良いのではないだろうか。

注

(1) 本稿では、『全傳』および『後傳』は觀文書屋乾隆四八年重刊本、『三傳』は經文堂本を参照する。いずれも上海古籍出版社「古本小説集成」所収の影印本による。

(2) 小松謙『中國歴史小説研究』（汲古書院、二〇〇一年）一六〇頁

(3) 拙稿『説唐後傳』における薛柳夫婦故事考』（『中國古典小説研究』第十六號所収、二〇一一年）

(4) 「掃北」は、版本によっては『説唐小英雄傳』と題され全十六回で完結しているものもあるが、『後傳』五五回本版と比較すると、回頭詩の存在や文章表現において前者は簡本、後者は繁本とも言い得る違いがあるものの、内容自体に大きな差異はない。

(5) 拙稿『羅通掃北』に見る英雄物語の「創作」（『早稻田大學學院文學研究紀要』第六十五輯、二〇二〇年）。「中國の歴史英雄物語に頻出する要素」については、大塚秀高氏が「薛家將物語の生成と發展——清宮廷演劇との關係を中心に」（埼玉大學大學院人文社會科學研究科博士後期課程學際系紀要『日本アジア研究』第一四號、二〇一七）において「物語素」と稱されており、當該拙稿においてもその言葉をお借りしている。

(6) 「好個不孝畜生、你不思祖父、父親天大冤仇未曾報雪、又不聽母訓、反到這裡稱什麼英雄、剿甚麼番邦、與國家出甚麼力」
(7) 「悶坐營中忽朦朧睡去、見我祖父、父親到跟前、身帶箭傷、說…不孝畜生。我（你？）祖父、父親爲王家出力、死于非命。你不思與祖父、父親報仇、反替不義之君出力」（括弧内筆者）
(8) 『後傳』第十一回「公主、本帥若有口是心非、哄騙娘娘、後來死在七八十歲一個槍尖上。」

(9) 注（2）前掲書一六五頁～一六八頁

(10) テキストは古亭書屋一九七五年刊影印本を使用した。

(11) 王秋桂主編『善本戲曲叢刊』七〇（臺灣學生書局、一九八七年）所収本および一九五五年中華書局版を併用した。

(12) 根ヶ山徹「乾隆三十六年版『綴白裘』七編、八編の上梓とその改訂」(『東方學』第九八輯、一九九九年)

(13) 京劇、越劇は『俗文學叢刊』(新文豐出版、二〇一六年)の「戲劇」部を、子弟書、太鼓書は同叢刊の「説唱」部を、川劇は四川省川劇藝術研究院他編『川劇劇目辭典』(四川辭書出版社、一九九九年)を、秦腔は陝西省藝術研究所編『秦腔劇目初考』(陝西省新華書店、一九八四年)を、梆子戲は山西、河南、陝西、河北、山東省藝術研究所合編『中國梆子戲劇目大辭典』(山西人民出版社、一九九一年)をそれぞれ参照した。また、徐燕『隋唐故事考論』(中國・揚州大學博士學位論文、二〇一〇年)では演劇に「羅成修書」、漢劇に「羅成寫書」があることが述べられている。

(14) 青木正兒『支那近世戲曲史』(『青木正兒全集』第三卷版、春秋社、一九七二年)第四篇「花部勃興期」および小松謙「中國古典演劇研究」(汲古書院、二〇〇一年)Ⅲ、「演劇と他の藝能の關わり―白話文學史構築の試み―」第三章「秦腔の原型について―齊言體演劇の成立過程―」、傳謹『中國戲劇史』(北京大學出版社、二〇一四年)第四章「百花爭艷・繽紛多彩的地方戲」を参照した。

(15) 井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘共著『花關索傳の研究』(汲古書院、一九八九年)を参照した。

(16) 田仲一成「中國における敘事詩から戲曲への道―英雄祭祀と英雄劇―」(『日本學士院紀要』第六六卷第一號、二〇一一年)では、處刑による復讐を民衆的、俠徒的な立場での英雄

の鎮魂とする。

(17) 磯部彰「迎神賽社禮節簿四十曲宮調」に收められる『西遊記』關係隊舞戲について(『集刊東洋學』六十、一九八八年)では、影印本の表紙に「萬曆二年正月十三日」とあることから、當該帳簿について「萬曆」年間當時のものではなく乾隆年間に萬曆原本から轉寫されたものかもしれないとする。注(2) 前掲書九二頁では、磯部氏の指摘と避諱の状況から「明代はもとより、清代のものとも見なしがたく、おそらくは民國に入つて抄寫されたのではないか」と考えるものの、「かなり古い祭祀の實態を伝えるものとして注目してよいだろう」と述べる。演目については田仲一成『中國演劇史』(東京大學出版會、一九九八年)一三三頁～二五一頁を参照した。

(18) 『古本戲曲叢刊』二集(上海商務印書館、一九五五年)に清抄本影印が收録される。本稿では同じ影印を收録した臺北・天一出版社刊行の『全明傳奇』版を参照した。

(19) こうした變化は、千田大介「岳飛故事の變遷をめぐって―鎮魂物語から英雄物語へ―」(『中國文學研究』第二三期、一九七七年)において指摘されている。また笠井直美『われわれの境界―岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族(上)』(『言語文化論集』二三卷二號、二〇〇二年)では、『續精忠記』における岳飛の言動について、忠義や報國よりも己の名譽回復と遺兒たちを重視する傾向があることを示唆する。

(20) 前掲注17『中國演劇史』一二一頁

(21) 『三傳』第三回「陛下不記得、那年掃北、羅通下存與公主

立終身之誓、若忘了、死在八九十歲老達子手中、今果應其言。」

- (22) 『古本戯曲叢刊』初集(上海商務印書館、一九五四年) 影印本

(23) 『全傳』第五七回「羅成聽他罵得尅毒、一時性起、大怒拔劍、把雄信一劍砍爲兩段。他一點靈光、直往外國去投去了。後世借了葛蘇文、來奪唐朝江山、此言不表。」また、『後傳』第十六回で、十五歳になるまで口をきけなかった薛仁貴が部屋に入ってきた白虎を見て驚き聲を出せるようになったのは、羅成が死んだからだとし、轉生を示唆する。

- (24) 『詞話』第四四回「當薛仁貴保駕征遼之時、遼將葛蘇文就是此時後話。」および第五一回「茂公說…主公、不可造。不出二十年、羅成要轉世爲臣保駕。」

(25) 薛仁貴が白虎星の下凡であることは、明成化七年北京永順堂刊本のテキストが現存する説唱詞話『薛仁貴跨海征遼故事』に見える。さらに萬曆年間富春堂刊傳奇『薛仁貴跨海征遼東白袍記』第四二折では、薛仁貴に敗れた葛蘇文が龍の正體を顯し、折末尾の七言絶句が蘇文と仁貴がそれぞれ青龍と白虎であることを示唆する。なお、明代までの興唐故事側には單雄信を葛蘇文に、羅成を薛仁貴に結びつける描寫があるが、征東故事側には葛蘇文と薛仁貴をそれぞれ單雄信、羅成に結びつける描寫はない。

(26) 大塚秀高注(5) 前掲論文においても『説唐小英雄傳』は説唐シリーズの要石として、『説唐全傳』と『説唐薛家府傳』の間に配置されたに相違ない。」と述べられている。

(27) テキストは『俗文學叢刊』第五三六冊「説唱」部(新文豐出版、二〇一六年)による。また、大塚秀高「上海刊行の『石

印鼓詞』と小説、宗教儀禮・宗教演劇のかかわりに關する研究」平成十年〜平成一二年度科學研究費補助金研究成果報告書(二〇〇一年)も參照した。

(28) 「應該金童星歸位、三兒白虎關楊藩轉世、死於丁山之手、冤冤相報。」

(附記) 本研究はJSPS 科研費 19K23053による成果の一部である。

* *

作者：柴崎 公美子

Author: SHIBASAKI Kuniko

標題：説唐系列小説中故事的銜接與延伸——關於羅家的報仇

Title: The Retaliation of the Luo Family 〃羅家、and Its Literary Fecundity in the Shuo Tang 〃説唐、Novels

摘要：清乾隆時期《説唐全傳》、《説唐後傳》、《説唐三傳》陸續出版、這三部在中國被稱爲「説唐系列小説」的作品、原本其各自的故事原型擁有平話、戲曲、小説等不

同體裁而各成系統。但最終之所以能冠以「說唐」之名而得以系列小說問世，描繪羅成、羅通等羅家將的故事在這過程中起著比較重要的作用。而關於這一點，目前並未見有研究者論及。本稿以按故事開展的時間順序而置入《全傳》和《後傳》之間的《羅通掃北》一節為例，探討了故事主人公羅通的「報仇」情節對《全傳》、《後傳》、《三傳》的故事銜接以及對故事內容的延伸等問題。「報仇」最終會變成使故事延伸的一種「功能」，但包括這樣的機能變化在內，說唐小說系列中對「報仇」的使用，可以看作是清代小說創作的一種新形式。

關鍵詞…《說唐全傳》《說唐後傳》《說唐三傳》 清代小說
羅家將